black snow

畔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｂｌａｃｋ　ｓｎｏｗ

【Ｎコード】
Ｎ２８１６Ｚ

【作者名】
畔

【あらすじ】
何度目かの高度経済成長期が過ぎ、地球は再び汚染された。
１２月。大気に舞う塵によって黒い雪が降る。酸性雨、磁気異常、終末の世界。
劣悪な環境の中、世界が滅びると言われている中で一掃屋（クリーニング）のナイン・ペンジャスは淡々と業務をこなす。
そんなある日、彼の運命を変える依頼が舞い込んでくる――――。

the opening

雪が黒い。
窓から覗く景色は雨が降る予兆とでもいうかのように白んでいた。ナインはそこに黒い斑点を見つける。声を出す間もなく、白のキャンパスに墨汁を落としたような黒い斑点が急速に増えた。斑点は宙を漂い、やがて地面へと消える。
黒い雪。
緑を取り戻したと思われた地球は何度目かの高度経済成長期を迎え、再び汚染された。
光の届かない街、便利を求めすぎた代償。
黒い雪はそれを顕著に示している。

プルルルル。プルルルル。

味気のない音が空気を震わせる。ナインは受話器を取った。
「もしもし。……はい、そうですが。———ご用件は？」
壁掛け時計に目をやる。アナログ式の、幾分か時間がズレている時計。便利さの代わりに与えられた談笑の一つ、磁気異常。
「……申し訳ありませんが、当店はそのようなことを取り扱っておりません」
住宅街からやや離れた場所に建っている、こじんまりとした店。看板すらかかっていないが、それでも都市部から客は来る。
客の言葉を聞いたナインは形の良い眉を顰めた。舌打ちをしたい

気分だ。
「……分かりました。明日の三時ですね」
ナインは表に出る。そこでは一頭の飛竜が寝そべっていた。彼が近付くと、飛竜は眠たげに瞼を開けナインを見やった。
「今日は少し遠くまで飛ぶぞ、ドラ」
愛竜の頭を撫でてやり、その背中に飛び乗る。飛竜――――ドラ――――は翼を広げ、ゆっくり上昇した。

「ねえジオ、『一掃屋』なんて本当にいるの？」
ベラ・キャロルは厳つい面立ちをした男に尋ねた。父親譲りの褐色の肌に映える深紅の瞳が不安げに揺れる。
一掃屋は簡単に言うのなら、何でも屋のことだ。田舎のことなど気にもかけていない政府の軍に代わってならず者を一掃してくれるから、そのような名がついたのだと言われている。主な依頼が、はびこる悪を成敗してほしいというものであるというのも由来の一つだが。
彼女の父親――――ジオ・キャロル――――は、途中で通話を切られた携帯のディスプレイに視線を落とした。待ち合わせの場所に到着したら電話を入れると言われてからもう三十分が経過していた。
その時だ。上空から帽子を目深に被った青年がやってきた。
「お待たせしました。荷物を預かりに来ました」
ベラは彼が意外にも細身だったことと――――ベラは自分の父親のように武骨な男が『一掃屋』をしているかと思ったのだ――――、若

かったことに驚いた。自分とあまり歳が変わらないように見える。
青年――ナイン――は言葉を続けた。
「尚、お預かりした荷物が破損しようと紛失しようと当店は一切責任を負いませんのでご了承ください」
それにはジオが反応する。
「そんなの聞いてねえぞ！！」
するとナインは鋭い眼光をジオに向けた。
「俺の仕事は預かった物を綺麗にすることだ。業務外のことに責任は持てないね」
「チッ……！　しょうがねえな。御雨以上に腕の立つ一般人はいねえんだ」
「『荷物』は？」
「あの家の中だ」
ジオは北西に位置する色あせた小屋を指した。ナインは頷き、「数は？」
「十五だ」
「なるほど。それじゃあ料金の話だが――」
ナインは金額を伝えた。ジオの顔色が急速に蒼くなっていくのが分かった。話を飲み込んだ頃には、鬼のように憤怒していた。
「バカヤロウ！　そんなに払えるか！！」
「なら、交渉決裂だな」
ナインは肩を竦めた。飛竜に乗ろうとしたその時、携帯が鳴る。
ナインはジオに背を向け、通話ボタンを押した。
「大変長らくお待たせしました、『ペンジャス・クリーニング屋』です。……本日ですか？　それなら――」
「待て！　ちゃんと金を払う、だから俺の依頼を聞いてくれ！！」
慌てて押しとどめるジオをナインは一瞥した。
「――それなら、五時以降ということになりますが。……毎度ありがとうございます。では、五時に〇〇ビルですね。承知しました」

ピッと通話が切れる音が静寂の中に響く。
「それで、俺はどうすればいい？」
「『荷物』を綺麗さっぱり片づけてくれ。ただし、清掃しすぎるなよ？」
「それには別料金が加算されるが」
「構わない。背に腹は代えられないからな」
「分かった」
ナインは一度飛竜のところへ戻ると、銀に鈍く輝く銃一丁と何本もの剣を取りだした。短剣、長剣、長さは様々である。
「スゲェ数だな」ジオは感嘆する。
「趣味で集めているだけだ」
「さすが一掃屋ってとこか」
それを聞いたナインは露骨に嫌そうな顔をしたが、ジオはそれに気付いていなかった。
「あんた、この界隈じゃ『一掃屋』の名で結構有名なんだぜ」
『荷物』を一掃しようと室内に繋がる唯一のドアを開けるために取っ手に伸ばされた手が止まる。
ナインは冷めた目でジオを見据えた。
「俺の仕事は物を綺麗にすることだ。一掃屋（クリーニング）なんかじゃない」

thief

黄ばんだ空気が漂う中。
男は琥珀色をした液体が入ったグラスを手にする。すでにぬるくなってしまったそれは、余計に喉を乾かせた。男は手元の麻雀牌を睨む。どれほど眺めても牌が変わることはないのだが、それでも勝負に勝ちたいという執念が男の潔さを削いでいる。
男は目の前の若者に目をやった。金髪青眼の、眼光の鋭い若者。恐らく歳は男の半分もないだろう。
若者は男の視線に気づき、早くしろと勝負の続きを促した。
全くブレのない表情、きっと勝負はついている。だが、そんな若造に自分が負けそうになっているなど、彼は信じたくなかった。
「なあ……もう止めにしないか？」
若者は呆れたように言った。
「いや……まだだ！　まだいける！」
「そうだそうだ！！」
同じく麻雀に参加していた、どこまでも残念な面々は男に加勢する。
ナインは苛立ちを隠そうともせず、短く舌打ちした。
「分かった。それならさっきの賭けをナシにしてやる。あんたはただ、そのコートに忍ばせているものを素直に渡せばいいんだ」
男はぎくりとしてポケットの中にあるものに触れる。———どうして見破られた？
「あんた、それでバレてないとでも思ってたのか？　誰が見ても、挙動不審だったぞ」
「クソっ……！　こうなりゃ強行突破だ！！　行くぜ、野郎共！！」
「うおおお！！」
拳銃や刀を片手に向かって来る連中を、ナインは最小限の動きで

かわしていく。
適当に選んだ武器に手を伸ばしてみると、それは小型ナイフだった。まずまずの得物だ。
ナインはざっと周囲を見渡した。ジオの言った通り、『荷物』の数はきっちり十五だ。
十五人。彼らが依頼品を盗んだ犯人たち。
「只今をもちまして、依頼品の回収を行います。身の安全は保証しかねますので、せいぜい気をつけることだな」
その言葉と共に、ナインは男のコートを切り裂いた。
中から出てきたのは、光が入る角度によって色が変わる、直径五センチほどの宝石だ。魔石と呼ばれるそれは、古代の魔導師たちが自然エネルギーを凝縮し封印を施した石である。魔石が一つあるだけで街一つ分の自然が戻ると噂されている。だが、魔石は世界にほんの少ししかなく、そのほとんどを政府が管理しているのだ。そして政府は魔石を使って新兵器を作ろうと企んでいるらしい。
「噂には聞いていたが、初めて見たな」
ナインは魔石を手に取った。
貴重な品をなぜジオが持っていたのかは知らないが、ナインは知ろうとも思わなかった。
俺の仕事は他人を詮索することじゃない。
男は魔石を奪い返そうとしたが、ナインが長剣を手にし、切っ先を自分に向けてきたので抵抗を止めた。
「依頼品の回収を完了致しました」
冷ややかな声と共に、ナインは小屋を後にした———。

「取り返してやったぞ」
無造作に放り投げられた魔石をジオは慌ててキャッチする。
「危ねえな、オイ！」
「依頼された仕事は終わらせた。あとは知ったこっちゃない」
「チッ、無愛想な奴だぜ」
「それより、報酬はちゃんと払ってくれるんだろうな？」
「ああ。――――ほら、持っていけ」
ジオは平ぺったくて長い鉄の塊をナインに寄越した。よく見ると、それは手入れのされていない剣だった。
「数少ない対磁気性の剣だ。世界の巨匠が作った幻の一品だぜ。俺がそいつから貰ったんだ、大切にしろよ」
ジオは自慢するかのように言う。ナインは訝しげに眉を顰めた。
「これじゃ使い物にならないんじゃないか？」
すると、ジオは勝ち誇ったように言った。「この剣はな、切れ味なんかどうでもいいんだ。これは獲物を叩き潰すための剣なのさ」
「……あんた、いったい何者なんだ？」
「俺はただの一般市民だぜ」
「魔石といい、この剣といい……。とてもじゃないが、ただ者には見えないな」
「他人には干渉しないんじゃなかったのか？」
「疑問に思っただけだ。たとえあんたがお偉い様だったとしても、俺には関係ないが。――――それでは、またのご利用お待ちしております」
ナインは柱に繋いでいた縄を外した。自由に身動きが取れるようになった飛竜は気持ち良さそうに翼を伸ばす。
「待って！　……頼みたいことがあるの」
帰ろうとしたナインを引き留めたのは、ジオの娘のベラだった――――。

team

「頼み事？　まあ構わないが……。ただ、料金が発生するってことは忘れるなよ？」
「もちろん。……引き受けてくれる？」
ナインは頷いた。
「お引き受けしましょう。それで、依頼は何だ？」
「おい、ベラ」ジオはベラを呼び戻した。
「ちょっと待っててね」ベラはジオの元へ行く。
「いいのか、あんな奴に俺たちの計画をバラしちまって。報酬さえあれば何でもするような奴だぞ？　あんな血も涙もなさそうな奴を、俺は信用できねえ。もしかしたら政府に俺たちのことを差し出すかもしれない」
「馬鹿ね、ジオ。誰のおかげで魔石を取り戻せたと思っているの？　他の誰でもない、あの人じゃない。私たちには優秀な仲間が必要なのよ。彼ならきっと、協力してくれると思うわ」
「だが……」
「ね？　ナイン。協力してくれるよね？」
ベラは振り返って言葉をかける。話の内容を知らないナインは訳が分からないまま「ああ。……？」と答えた。なぜそんなことを言われたのか分らないが、彼は報酬さえ貰えれば、その他諸々のことなどどうでもいいことなのだ。

「あなたも」
透き通った声。

よく晴れた日。逆光のせいで、その女性の顔はよく見えなかった。だが、彼女が微笑んでいたことだけは憶えている。
綺麗な黒髪。手を伸ばせば届きそうな位置で切り揃えられている。
「あなたもいつか――――」
彼女の声は徐々に小さくなっていく。結局は聞き取れずに終わる。この続きを思い出そうと思ったことはあるが、ナインにはどうしても思い出すことができなかった。
ただ一つ憶えているのは、彼女がかけがえのない存在だったということだけ――――。

「ナイン？　大丈夫？」
ベラは覗き込むようにしてナインを見やる。
「あ……。悪い、話を続けてくれ」
そうだ。俺は今、街外れの村にいるんだった……。
ここはあの場所じゃない。あの人は、もう……。
「――――ということだ。これから街に乗り込むぜ」
「街？　一体何のために」
するとジオは訝しげな顔をナインに向けた。
「お前、話聞いてなかったのかよ。いいか、よく聞け。俺たちはな、魔石に頼り過ぎているんだ。自然を犠牲にしてでも敵国を倒そう、新兵器を作ろうと躍起になっている。魔石で自然を取り戻せばいいと思っていやがる。けどな、それじゃ駄目なんだ。魔石だって数に限りがある。たとえ今自然を取り戻したって、きっと俺たちは同じことを繰り返すぜ。そうなったら今度こそ終わりだ」
「要領を得ないな。もっと分かりやすく言ってくれ」
「つまり、私たちが努力しなければ緑は失われ続けるということなのよ。魔石のほとんどを政府が管理している。私たちは魔石を何

としてでも政府の手から取り戻したいの。政府の本拠地は街の中央にあるから、まずは街に侵入するってわけ。一般市民は街に入れないしね」
街に住居を持てるのは軍人か政治家のどちらかである。
ナインは冷笑した。
「そういう話ならお断りだ」
「何だと？！」
今にも胸蔵を掴みにかかってきそうなジオを何とかベラが止めた。ナインはフッと鼻で笑った。
「たかがそんなことで、政府に目をつけられたくないんでね」
「『そんなこと』だと？！　自然がどうなってもいいって言うのか！！」
「俺には関係ないことだ。大体、今の時代自然がどうのこうの言えるか？　俺たちが何もしなくても、いずれこの星は崩壊する。今こうしている間に終焉が訪れるかもしれないし、もしかしたら俺たちが死んだ後かもしれない。今すぐどうこうして何とかなる問題じゃないんだ。いちいちそんなことに首を突っ込んでいたら身が持たないね」
「ナイン、私のこと憶えてない？」
唐突にベラが言った。ナインは即答する。「ああ。あんたのことなんか知らない」
「ほら、昔はよく高台にある公園で一緒に遊んでたじゃない」
「高台……。憶えてないな」
「そう……。ごめん、人違いだったかも」
ベラは俯き加減に言った。
「協力、してくれるんだよね……？」
「俺は――――」

「――分かった、協力する」
「やったぁ！　じゃあ行こうよっ、早く早くっ！」
満面の笑顔を浮かべるベラ。ナインはため息をついて彼女の後について行った――。

team part2

「これは？」
ナインは影を落としてくる巨大な物体を見上げ、どちらに言うわけでもなく尋ねた。
「俺たちの飛行船だ。……っと、『仲間』には教えなきゃいけないよな」
ジオはにやりと不敵に笑う。ジオとベラは互いに目配せし、ベラが話の続きを言った。
「私たち、空賊なの」
「クウゾク？」

『昨夜未明、軍人のマイク・キーパーさん（３２）が空賊の襲撃に遭い、軽傷。政府は空路の警備をよりいっそう強化するようです。皆様も夜間の外出は極力控えるようにしましょう』

今朝、こんなニュースが流れていたような……。
「もしかして、今世間を騒がせているという空賊のことか？」
「それしかないだろ。ってなわけで、これからよろしくな」
空賊……。ナインは避けられないだろう戦いを連想する。警備が強化された今、戦い無くして街に入ることは容易ではない。

ナインはがくりと肩を落とした。
「ナイン？！」
「俺には無理だ。なぜなら……」
「なぜなら……？」
「俺は……面倒くさいほど条件が限定されている乗り物酔いだからだ」
「なんだそりゃ？！」
ジオは驚きのあまり目を丸くした。まず、冷徹無比な彼が乗り物酔いだということを信じられなかったし、条件つきというのも変な話だと思った。
「その条件って一体どういうものなの？」
「一つ目は、高いところを移動することだ。自分の足で移動する、スピードが速い乗り物、逆に遅過ぎる乗り物なら平気だが、スピードが変わる（変わっているように思える）ゴンドラみたいなものに乗ってる状態だとアウトだな」
「おい、なら飛竜はどうなるんだよ。お前普通に乗ってただろうが」
「飛竜はいいんだ、生き物だから」
「なんだそりゃ」ジオは呆れたように言った。
「二つ目は、微妙な速度。時速４０キロまでならまだいい。８０キロ以上でも全然ＯＫだ。だが、６０キロとかは止めてくれ。逆に気分が悪くなる。後は……そうだな、船が無理だ。あまり乗ったことがないから分からないが、多分１０分もたたずに酔うと思う。これば かりは条件のつけようがないな」
「よくそんなんで一掃屋ができたな……」
「言っただろ？　俺は一掃屋じゃないって。ただのクリーニング屋だ」ナインは肩を竦める。
「まあ、とにかくしっかりしてくれよ。お前が欠けると困るんだ」
ナインはその言葉に反応した。
「おい待て。まさか俺一人で何とかしろって言うわけじゃないよ

な？」
ごまんといる政府軍を一人で何とかできるわけもない。そう言うと、ジオは深く頷いた。
「俺の仲間を侮ってもらっちゃ困る。お前らっ、とっとと出てきやがれ！！」
すると、それを合図にジオの周りに人だかりができた。
「舵取りを呼び寄せるなんて、一体何の騒ぎ（パーティー）なんだ？　船長（ジオ）さんよぉ」
無造作に頭にバンダナを巻いた、左の頬に切り傷の痕がある男が欠伸をしながらやって来た。ヘイルと名乗ったその男は、酒瓶を片手に「新入り、一緒にどうだ？」とナインに話しかけたが、ナインはそれを断った。
「あら、結構イイ男を連れて来たじゃない」
キャビンから出てきた美女はナインを上から下まで眺めると、ねっとりとした口調で言った。
「私、レベッカっていうの。今夜一緒に……どう？」
レベッカはナインに詰め寄る。
「下らない冗談は止してくれ」
冷笑することもなく、ナインは淡々と言った。レベッカは意味ありげな笑みを浮かべる。
「フフッ。そうね。坊やをいたぶるのは、また今度にしておくわ。その時が楽しみよ」
そう言い残し、レベッカは姿を消す。
「悪ぃな、あいつはいつもあんな感じなんだ。元はいい奴だから、勘弁してやってくれ」
申し訳なさそうにヘイルが言った。
「あんたが謝る必要はないだろう」
「ま、それもそうだな」
ははは、とヘイルが笑う。こいつとは仲良くなれそうだ、とナインは思った。

その時、再びキャビンから人影が現れる。出てきたのはレベッカではなく、日に焼けた、健康そうな青年だった。歳はナインと同じか、年上かぐらいである。

「あんたが新入りだな？　俺はニックって言うんだ。よろしくな、レディ」

そう言い終えるなり、ニックはさっとナインの手を取って口づけする。

「なっ……！　俺は男だ！！」

ナインは憤慨した。彼の幼さが残る中性的な顔立ちに目を奪われた男は少なくない。もちろん、一人残らず成敗してやったが。

「ありゃ、男？　俺は女の子かと思ったぜ。なんだ、そうか！　それじゃ改めて、よろしくな！　友達！！」

「友達？！」

ナインは思わず大きな声で言った。友達になった覚えなど、まるでない。そもそも今出会ったばかりだというのに。

だがニックはそんなことお構いなしとでも言うかのように「出会った奴らはみんな友達！　そうだろ？」と笑いかける。

めでたい奴だ……。

ナインはそう思わずにいられなかった。

plan（前書き）

前話の乗り物酔いの話ですが、あれは作者の実話です（汗）

plan

「そろそろ街の付近だな」
ヘイルは舵を取りながらぼそりと言った。
先日に騒ぎを起こしたせいで――――責任は、勝手に行動したジオにあるのだが――――空路の警備が厳しくなっている。認証パスを持っていない彼らは正規の方法で街に入ることはできないのだ。そこでベラが思いついたのが、軍人もしくは政治家から認証パスを奪うという方法である。
ニックが召集をかけたので、彼らはニックの元に集まった。
「いいか、今夜の作戦はこうだ。まず、俺たちの誰かが奴らをおびき寄せる。そうだな……場所は街外れのバーだ。もちろん、本来そんなところにバーはない。バーと称して飛行船を置いておこう。新しくできたとでも言って乗り込ませればバッチリだ！」
「俺はバレる方に賭ける」
ジオが話に水を挿すと、他のメンバーもそれに頷いた。
「さすがに飛行船じゃあな……。プレハブ作るっても、もうそんな時間ねえし……」
ヘイルは日が傾きかけた空を見て言った。
「じゃあどーすんだよ？」
焦れたようにニックが言えば、辺りは静まり返る。
「なんだよっ、もう！　だったら俺の案でいいじゃん！」
「少しは頭使いなさいよ。飛行船が店代わりになるわけないでしょ」レベッカが冷たく言い放つ。
「うう～、レベッカがひどい～」
隣にいたナインに、わざと泣きつくフリをしてみれば。
「俺たちが軍人に変装して、奴らに近づきパスを奪う。これでいいんじゃないか？」
持ち前のスルースキルを発動された。他のメンバーも彼の言うこ

とに深く頷いている。ニックはふてくされたように――――もちろんこれもフリだが――――大きな声で言った。
「あーあ、何だよみんなしてさぁ！　なんか俺、いらねーじゃん？　もうメンバーから抜けようかな～」
実はこの時、レベッカやヘイルが笑いを押し殺していたのだが、ニックはそれを知らない。
「まあ、そんなこと言うなって。お前は俺たちにかかせないムードメーカーだぜ？」
ジオはそう言った途端、爆笑し始めた。それにつられてベラも笑いだす。
「ニック、ナインに悪気はなかったと思うの。だから……ふふっ、抜けるだなんて言わないで？」
「俺としては、別に抜けてもらっても構わないけどな～」ヘイルが軽口を叩く。
「私も困らないわよ～」続いてレベッカ。
「うわっ、本気にされた？！」
ウソ、どうしよう！　俺冗談で言っただけなのに！！！！
「嘘に決まってるだろ。本気にするな」
ナインは分かりやすく動転したニックをたしなめる。話を戻すチャンスが訪れたナインは「とにかく」と言葉を続けた。
「決行は夜になってからだ。それまでは待機していてくれ」

「はぁ……」

ナインは一人、ため息をついた。彼の頭に留まっている悩みは一つだけである。

飛行船、空、高い、動く。これだけのキーワードが揃えばもう十分だ。これからのことを思うと……地獄だった。酷い乗り物酔いというわけではないが、何ともないと言えば嘘になる。空を旅している間、ずっと気分が悪くなる、ただそれだけだ。それだけなのだが……。

「はあ……」

先ほどよりも深いため息が出る。体質的な問題なのか、酔い止めを飲むと一週間くらい意識が吹っ飛んでしまう。それが発覚して以来、薬を飲んだことは一度もない。

「ナイン？」

その言葉と共に姿を現したのはベラだった。

「もうすぐ決行の時間だよ。みんな、甲板で待ってるって」

「そうか。……あんたは行かなくていいのか？」

「ん～、一度行ったんだけどねぇ。ナインがいなかったから、あれ？　って思って。探しに来ちゃった」

「それは悪いことをしたな。すまない」

すると、ベラは少し哀しそうな顔をして「ううん、そんなことないよ。それじゃ、行こうか」と言った。彼がベラの表情の変化に気づくことはなかった。

「ああ、そうだな」

ｐｒｏｆｉｌｅ（前書き）

とりあえず主要メンバーです。途中から新たな仲間が加わるかもですが、一応載せておきました。

profille

名前：ナイン
年齢：１６（今年で１７）
性格：冷めている。面倒なことが嫌い。
備考：金髪蒼眼。童顔。武器を集めることが趣味。

名前：ベラ
年齢：１７
性格：しっかり者。時に無謀な行動を取ることも。
備考：黒髪紅眼。遠目から見ても分かるほどの美女。

名前：ヘイル
年齢：不詳
性格：普段は大雑把だが、意外にも几帳面。
備考：飛行船の舵取り。空賊になることは昔からの夢だったとか、そうじゃないとか。

名前：ニック
年齢：２１
性格：人当たりが良い。ただ、時々ＫＹ。
備考：黒髪緑眼。整った顔立ちをしている。動物好き。

名前：ジオ
年齢：不詳
性格：ヘイルにも増して、考え方が大雑把。そのせいで失敗することも多い。
備考：ベラの父親。厳つい顔をしている。ベラが自身に似なかったことに感謝すべきだろう。

名前：レベッカ
年齢：２４
性格：気分は世界の頂点に君臨する女王様。しかし、仲間を気遣う面もある。
備考：金髪紅眼の美女。どこか怪しげな雰囲気を醸し出す女性である。

army

男は街の外を歩いていた。カーキ色の軍服に身を包み、配給された長銃を肩に担いでいる。彼は街を護衛する兵士の一人だった。

この塀の向こうは煌々と輝いているのに、ここでは懐中電灯がなければ一寸先すら見えない。真っ暗、という言葉がぴたりと当てはまる。

世界の中心と思われる巨大な都市に入るための方法は二つしかない。一つは、地上から入ること。認証パスを持っていれば誰だって街に入ることが可能だ。二つ目は、空路から入ること。この方法は飛行船を持っている人間しか無理だ。空路から街に入る人間は限られているため、彼が護っている地上の入り口よりは検問が緩い。……とは言っても、国が誇る軍隊が待ち構えている。易々と侵入できるはずもない。先日同僚が賊に襲われたという知らせが入った時は驚いたが、警備の強化が施された今、危険を冒してまで街に入ろうなどという愚か者は滅多にいない。

侵入者が来ない限り、男のやるべきことは訪れない。男は思わず出そうになる欠伸を噛み殺した。その時、ジャリ……と砂を踏む音が聞こえた。

「誰だ？」

男は警戒の色を強めるように言った。すると、そこに現れたのは同じくカーキ色の軍服を着た仲間だった。

「交替の時間だぜ」

「あ、ああ。もうそんな時間だったか。全然気づかなかったよ。どうやら物思いに耽っていたようだ」

男がそう言うと、代わりに来た兵士はにやりと笑った。

「ずいぶんと疲れているみたいだな。お前が欠伸してたの、上司に告げ口してやろうか？」

「おいバカ、よせよ。しっかり聞いてやがって。今度奢るから、今のは見逃してくれ」
「分かった。――――そうだ、お前にこれをやるよ」
兵士は手の平に収まるほどの小瓶を取り出す。
「？」
「そう怪しむなよ、それは特別な栄養剤だ。でもま、中身は市販のと変わらないが、なんと俺の彼女の手作りなんだぜ。分けてやるだけでもありがたいと思え」
「何だよ、のろけかよ。そういう話は他所(よそ)でやってくれ」
男はそう言いながらも貰った錠剤を一つ飲み込んだ。

「うまくいったな」
ニックは男のポケットから認証パスを拝借すると、にやりと笑って言った。彼の隣には不機嫌そうなレベッカがいる。
「なによ、さっきの。誰があなたの彼女ですって？」
「まあまあ。言葉の綾、気にしない気にしない！」
「あなた如きに言われるのもムカつくわね……」
「サラッとヒドいこと言うなよー。　俺ってば結構繊細なんだぜ～？」
「とてもそうには見えないわよ」
呆れたようにレベッカが言うと、「あ、バレた？」とニックは白状する。この時ナインはようやく、途切れることのないコントのような会話を続ける二人をたしなめることができたのだった。

「この調子で他の兵のパスも奪っていこう」

空路からの入り口を護っていた兵士は人の気配を感じ、ハッと飛び起きた。あまりにも暇だったので、うたた寝をしていたのだ。

声をかけてきたのは何人かの軍人だった。先頭に立つ人物はキャップを目深に被っているためにその表情を窺えないが、そこから覗くハニーブロンドは誰の目から見ても美しいものだった。兵士が思わず見とれていると、その人物は「さっさとここを通してくれないか」と言った。その声色には、何をぼさっとしてるんだ、という抗議が込められている。気が緩んでいたことを恥じたのか、声を聞いてその人物が男だということが判明したからなのか、兵士はハッと我に返ると慌ててパスを確認した。

「はい、ＯＫです。どうぞお入りください」

それにしても、あの人たち……。どこかで見たことがあるような……？

彼らが去った後、兵士はふと疑問を持った。

「まあ、同じ職場の仲間だしな。どこかで会ったことはあるか」

兵士は一人頷くと、再びうたた寝をし始めた――――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2816z/

black snow

2012年1月12日23時50分発行